

編集後記

『韓国語学年報』第5号をお届けする。

2005年3月の創刊以来、今回の第5号まで『年報』の名の通り年次ごとに刊行できたことにまずは胸をなで下ろしている次第である。

さて、今号は印省熙氏による日本語の「は」と韓国語の「가」に関する対照研究が巻頭を飾っている。「は」≒「는」, 「が」≒「가」という大まかな対応関係がある中で、この論文は「は」が「가」に対応する用例の分析を行っている。そしてこのような対応が起こる原因について、「は」と「가」自体の文法的意味領域の違いによるものに加えて、日本語での「は」—「名詞述語文」、韓国語での「가」, 「는」—「動詞述語文」という文のシンタクティカルな構造によるものであると論じている。日本語が名詞述語文を好み、韓国語が動詞述語文を好むという傾向は、つとに論じられていたことであるが、この傾向に助詞の「は」, 「가」, 「는」を相関させた議論を行ったところに、本論文の妙味がある。

続いて、菅野裕臣先生による翻訳である。旧ソ連の朝鮮語、日本語学者にして、レニングラード類型論学派を創設したA・A・ホロドーヴィチ(A.A.Холодович)が1954年に著した「朝鮮語文法概要 Очерк грамматики корейского языка」はその今から半世紀前に旧ソ連の朝鮮語学が到達していた水準を雄弁に物語ってくれる実に貴重なものである。

次に掲載されている翻訳は、

Palmer, F.R.(2001²) *Mood and Modality*. (Second edition) Cambridge: Cambridge University Press.

の後半部分の日本語訳である。ムード論に関しては、かつての epistemic 対 deontic といった二元論的な切り口からのアプローチの時代は過ぎ去り、様々な言語のタイポロジカルな研究を背景にした重層的かつ精緻な議論がなされるようになってきている。今回の翻訳はその議論の中心にあり、今後のムード研究の出発点となるべきものである。

今回論文その他の原稿を寄せていただいた方々に、御礼申し上げたい。今後、第6号以降、小誌がさらに発展していくように、神田外語大学所属以外の韓国語学研究者の方々のご投稿をお願い申しあげる。

毎号の編集後記で繰り返しているが、小誌に掲載された論文は、査読者が初校原稿を読み、問題点や改善点の指摘を徹底的に行い、完成稿に至ったものである。それは、創刊号のこの場で述べたように、旧ソ連におけるレニングラード類型論グループの刊行物が、編集委員会と論文執筆者との間で熱心なやりとりをもとに編集されたことに、及ばずながら倣おうとしたものである。この方針は、本誌の基本方針としてこれからも変わることはない。

さらに、査読者の狭い見識に合致しないスタイルの論文を排除するという立場をとっていないことも強調しておきたい。あくまでも学問的な観点から意義があるどうか判断の基準であり、査読者の思い上がりに基づいた排他的な編集を行ってはいないのである。小誌は、すべての真摯な韓国語学研究者に開かれている。今後の投稿を歓迎するとともに、査読者と執筆者が協力して言語学的な水準の高い論文を掲載する方向性を堅持することを固く約束する。

なお、小誌の刊行に当たっては、“神田外語大学研究助成”の援助を受けた。記して、関係者各位に感謝の意を表す。

2009年3月

神田外語大学韓国語学会

浜之上幸

権容璟

平香織